

テーマ「自閉症スペクトラムの基本的理解と

重度知的障害を伴う方への支援について」報告

講 師 西多摩療育支援センター
小児科医 吉野 邦夫 氏

場 所 芹が谷園舎 体育館

日 時 令和2年1月27日（月）
15:30～17:30

発達とは一生続くものであり、遺伝的なものと環境的なものが関係してくるが、育ちの方（環境的なもの）が大切になってくる。10歳以上になると育ちの教育的な部分が花を開くようになる。そのため、「個性だから・・・」ではなく、10歳以降も順応に生活ができるよう教育していく必要がある。

発達障害とは時代、国によって変わるもので国際的に完全に一致した概念ではない。

発達障害には大きく2つに分けることができる。1つ目は古典的な発達障害。昔から知られていた障害で知的障害、知的障害をともなう自閉症、肢体不自由、視覚、聴覚障害等が含まれる。2つ目は最近の発達障害と言われるものである。これは知的障害がない、もしくは軽度のもので、高機能自閉症、学習障害、大人の発達障害が含まれる。中でも大人の発達障害は大きな問題で、高校や大学を優秀な成績で出てるが、社会人になり鳴っている電話を取るよう言われると「知らない人から掛かってきた電話には出てはいけないと母に言われた」と普通ではない発言が聞かれることがある。特徴として、孤立傾向、友達が少ない、一匹狼で危なっかしい特徴がある。職場で見守ることが大事。

発達障害と合併しやすいものとして虐待、愛着障害、マルトリートメントが挙げられる。これらは乳幼児期や低年齢期に誤った扱いや対応、恐怖などを受けると脳に構造的異常を形成し、発達障害と類似したり区別しにくい問題を発生する。後年、対応や援助が改善されると脳の異常も回復することがある。発達障害の支援だけでなく、愛着再建の支援も必要となる。愛着再建を行う際には、テクニックが必要となり包み込むようなスタンスで見守ることが大切になる。

障害の種類として、軽度発達障害、知的障害、注意欠陥多動性障害（ADHD）、学習障害（LD）、自閉症スペクトラム（ASD）が紹介される。それぞれ特徴があり、障害によっては考え方も変わってきている。

自閉症スペクトラムの人々について、知的には超天才から重度障害のあるタイプがあり、人生設計が変わってくるため分けて考える必要がある。

3歳前後からの構造化援助やコミュニケーション指導の中で教育（保育場面）、家庭生活、地域生活での援助や指導、視覚的コミュニケーションや視覚的イメージ化、学習の機能化これらを行うことで講師の経験上25歳～26歳になる方は概ね穏やかに育つと話される。指導する人との人間関係がとても大事である。

大人というと障害がある、ないに関わらず成長という言葉から遠いイメージがある。さらに、重度の障害がある方だと長年このように生活してきたから変えるのは難しいのではと思ってしまったことがあった。しかし、研修に参加し講師の方から重度の障害を持っている人は20歳から花を開くという言葉聞き、諦めがちに思っていた部分に希望があるように思えた。今後、諦めがちに思っていた部分も諦めないで関わっていきたい。



以上